続 徒然つれづれ

言葉の遣い方

桑野　巍

私たちは毎日いろんな言葉を遣い、いろんな言葉に出合っている。言葉は人類だけが持つ便利品だが、無意識に遣っていることも多い。逆に言うと意識すればするほど厄介なのが言葉なのかと思うこともあるし、ある時はあの言い回しは主体性のない無責任さの表れではないかと思うこともある。例えば気象庁の発表がそれだ。「近畿地方は梅雨明けしたとみられる」という気象庁の発表は逃げ道を作っているとしか思えず、腹立たしい。

ある時若者が「何々したじゃあないですか」と話しているのを耳にして「これは問いかけなのか」と思うことがあり、自信のない日本語が遣われている。また、国会議員が「粛々と審議をすすめる」と発言するが、これはいただけない。粛々と審議は当然のことで議員の責務ではないかと言いたい。地方議会でも理事者に対して議員の品のないすごみを効かせた発言が飛んで、圧力をかけているのではという場面に出合ったこともあった。もう一つは議場でセンスのない野次を飛ばし、自身の存在をアピールしたい下品な議員もいた。その昔この国には「恥を知れ」という規範があったが、いまやこの言葉は死語と化したのかと感じとったものだ。

また最近は流行語、略語がブームなのか、若者間だけでなくメディアにもよく登場する。例えば「KY」などがそれだ。メディアが面白おかしく取り上げるのは困りもので、私は品格のない流行語、略語が大嫌い派だ。こうした言葉は遣う側からしてみれば親しみが増す言葉だろうから、嫌い派がストレスを貯める必要はないと言えるかも知れないが…。

「それにしてもいまの若者は言葉を省略するのが上手」という国語学教授もいる。彼の教授室に入ってきた女子学生が「先生、チョコ食べる？」とチョコレートを差し出したが先に学生が食べ「アザース」と言ったそうだ。教授は「何のこと？」と聞くと「ありがとうございます」の短縮言葉だったとか。「チワ」（こんにちは）「ラッシャイ」（いらっしゃい）「キモイ」（気持ち悪い）などは朝飯前の略語らしい。教授はみんな忙しい時代だから省略語が流行していると考えれば、特に気を使う必要もないという。

携帯電話などのメール普及や口コミ、マスメディアなどでコミュニケーション重視の立場からみれば問題はないと言い、教授は略語容認派なのだ。私はテレビのニュース以外をあまり見ない方だが、タレントらしき人が人気を先取りしようとして流行略語をこれみよがしに遣う映像が目に入ると、日本語の乱れはここまで来たのかと気懸かりになってしまう。

もう一つは「思います」の遣い方で、正しく遣われれば奥ゆかしさも感じるが、どの司会者も「何々を紹介したいと思います」と言うが、これは「紹介します」で十分だ。公務員の中には「総務省さんがとか、愛知県さんが」といった具合で、省庁や他の自治体を「さん付け」にする者が多い。さん付けは敬語だから無難とでも思っているのだろうか。敬語には尊敬語、謙譲語、丁寧語の三種類があるが、総務省とか愛知県の場合「さん付け」は必要ないと考えるがどうか。

一方でこのところカタカナ語も増えている。公文書、広報紙誌などでも遣い過ぎ傾向だ。モニター、アンケートぐらいまではよいとしてもコーポレート・アイデンティティ、プロパガンダなどは分かり難い。行政独特のカタカナ語は特に難解だ。某自治体はお役所イメージを一新するため、分かり易い表現を心懸けているがどうしてもカタカナ語を使いたくなるし、これが時代の流れという。

カタカナ言葉より大事なのは方言と思って大阪に派遣された国家公務員に「大阪で便利と思って遣った言葉は？」と聞いた。彼は少し考えて「おおきに」と「すんまへん」を挙げた。「おおきに」はサンキューとノーサンキューの意味があるし、「すんまへん」はあらゆる時に遣えて便利だったという。特に議員との接触で肩をポンと軽く叩いて「すんまへん」は効果的だったと彼は述懐していた。彼の挙げた二つの言葉は大阪勤務時代にもらった宝物といまも大事にしているとか。言葉も心も荒れ放題の現代だが、まずは正しい日本語を遣うことを心懸けたいと思う。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）